2019年4月～2020年3月にかけて、イギリスのケンブリッジにて在外研究を行いました。所属先はFaculty of English(Academic Visitor)とWolfson College (Visiting Fellow)です。当地では主にケンブリッジ大学図書館と英文学科の図書館、そして市内の大学付属美術館・博物館にて資料収集・調査、研究を行いました。

研究内容は主に以下の3点です。

①イギリス（19世紀～20世紀）における貸本屋（circulating libraries）史に関する調査

②イギリスの刑務所図書館・読書クラブに関する調査

③短編小説の収集・分析と文学理論の読解

これら3点について今後の研究・教育活動に向けて非常に有益な知見と資料を得ることができました。以下、それぞれの研究内容について簡潔に報告させて頂きます。

① イギリスにおける貸本屋史――ブーツ・ブックラバーズ・ライブラリーの足跡を中心に

19 世紀のイギリスでは公共図書館が開設され、貸本屋業界が栄えました。公共図書館は主に労働者階級の教育普及を目的に開設されたため、館内に収められている本には実用的なものが優先的に選ばれていました。その一方で、生活にも余裕があり、読書が生活の一部として定着している人々に向けて、文芸書や専門書を揃える貸本屋（circulating library)が続々と開店しました。

報告者はここ数年にかけて読書療法と読者の歴史について研究を続けています。この間に19世紀末～20世紀前半のイギリスで活況を呈した貸本屋の社会的役割ならびに当時の利用者の実態にも関心を寄せるようになり、在外

研究中により詳しく調べることにしました。ケンブリッジ大学図書館で入手した資料から、今もイギリスの大手ドラッグストアとして有名なブーツ（Boots）が、かつて貸本屋業にも参入し、大きな成功をおさめていたことが分かり、ブーツ・ブックラバーズ・ライブラリーの足跡を調査しました。

19 世紀末に開店したブーツ・ブックラバーズ・ライブラリーは 1960 年代に事業を撤退するまで全国各地に店舗を構え、最盛期には会員数が 100 万を超えたといわれています。毎年およそ 125 万冊もの図書を購入するブーツ・ライブラリーの勢力は、出版業界の動向にも大きな影響力を及ぼしたといわれています。

同ライブラリーが成功をおさめた背景には、いくつかの興味深い特色があります。まず、経営のすべてが社長の妻フレーレンスに一任されていたということ、そして会員の大半が上流から中流階級の女性たちであったということです。さらにドラッグストアならではの情報と知識を活かし、徹底した衛生管理のもとで図書を扱っていたということ、他の貸本屋に先駆けて新しいジャンルの書籍を会員に提供した、という点などが挙げられます。

ブーツ・ライブラリーの事業と運営、そして同ライブラリーを愛した会員たちの歴史には本を介して生まれる多様なエピソードが溢れており、イギリスにおける読者の歴史を考察するうえでも非常に示唆に富む知見を得ることができました。

今回の調査の一部は、明治大学図書館紀要の『図書の譜』（2020 年 3 月）に掲載させて頂きました。

② イギリスの刑務所図書館と読書クラブ

ここ数年間に、刑務所における読書クラブのルポルタージュが出版され、日本でも大きな反響を呼びました。代表的なのはアン・ウォームズリーの『プリズン・ブック・クラブ――コリンズ・ベイ刑務所読書会の一年』（日本語訳 2016 年）とミキータ・ブロットマンの『刑務所の読書クラブ』（日本語訳 2017 年）です。前者はカナダ、後車はアメリカにおける刑務所の読書クラブに貢献した女性たちのノンフィクションです。

読書療法の先行研究には、少年院や刑務所における読書療法の効果についての国内外からの報告が既に散見されますが、イギリスの事例報告はさほど多くなかったため、報告者はイギリスの刑務所図書館が発行している機関誌、関連する新聞記事、雑誌記事、パンフレット、学術論文を広く収集し閲読する作業を行いました。

その結果、囚人のリテラシーの向上を目指すプログラム、懸賞つきのエッ

セイコンテスト、図書館での配架、作家を招いての講演会、詩作会など様々な取り組みが実施されていることが分かりました。他方で、実際にどのような作品が読まれ、どのような反応と効果が見られたかという報告は非常に少なく、今度も調査を続ける必要があります。刑務所図書館の運営は、政府の予算に左右されるため、安定し継続性のあるプログラムを続けることが難く、一定の効果を得にくいという課題も資料からうかがえました。

③ 短編小説と文学理論の読解

短編小説（主に日・英）というジャンルのもつ特徴と技巧を分析し、そこに描かれる喪失体験ならびに＜音＞の感性がどのように描かれているか考察するために、報告者は作品収集と読解を継続してきました。2019年度はこの作業をイギリスでも継続し、主に短編小説にみられる技巧と特徴について論じた先行研究とイギリスで最近発表された作品の閲読作業を行いました。

2019年度は新たに400以上の短編小説を読解しました。ケンブリッジ大学と英国放送協会（BBC）編纂の短編小説集とイギリス国内で厳選のうえ収められた短編集を新たに得ることもできました。

文学作品は、その創造的な表現方法を通して、環境表象の考察に一石を投じると考えられます。言葉、物語、イメージの力を通して、読者が環境への配慮を深め、環境破壊を理解し、未来に向けて新たな選択肢を生み出す可能性を探ることが期待されます。報告者は、言葉を通して作品が人間の＜音＞の感性を描き、＜音＞を通じて場所の概念がどのように探究され、人間と自然との間を媒介するのかを考察しています。数多くの作品を読み、その表面上は、聴覚よりも視覚に重きを置いて描かれている作品が多いこと、そしてイギリスように多様なバックグラウンドをもつ人々によって構成されている国では、＜音＞が個人的愛着、社会的構築、そして環境破壊への警鐘と重層的なハーモニーを奏でていることが読み取れます。様々な作品を通じて浮かび上がる＜音＞は他者を知らせるサインでもあり、よりグローバルなネットワークの結節点ともなり、過去へのノスタルジアのみならず、より原始的な人間の感性への回帰をいざないます。

また、報告者は、これまで喪失体験者が直面するグリーフワークのなかで文学作品を処方することの可能性について研究してきました。短編小説は、時間とボリュームの面で読み手に負担がかからないというメリットがある一方で、縮約された世界に描かれる一つの世界観の背景には巧緻な技法や大きな思想が流れており、長編小説よりも読みにくい場合もあります。また登場人物が生きる時間と世界に制限がかかるため、読み手が彼らに同一化しにく

い可能性もあります。こういった課題を念頭におきながら、短編小説を用いる利便性と効果を検討するには、ひとつひとつの作品を丹念に読むという地味な作業が土台になります。

この一年間、短編小説の作品ひとつひとつを一事例として読みこんでいくうちに、＜短編小説＞というジャンルの大きな全体像とその意義もより明確に見えてきました。

以上の３点が、在外研究の内容となります。このほかにも、市内の美術館や博物館に展示されている作品と資料に触れ、文学作品からは得ることのできない観点を得ることができました。